

Triumph onedollar ～勝
利への放浪者～

リューヤ

ラプチナ王国公認冒険家は前回の村ではとんだ無駄足を食わされてしまったことに腹を立てていた。腹いせとしてガセネタを掴ました宝石店の男を文字通り八つ裂きにしたのち、早々に村を出てすでに2日、一行は現在進行方向を北西に向けて歩いていた。

この大陸には村や町が比較的少なく、一つの町の移動だけでも遠ければ軽く丸一日かかってしまうことだってザラだ。あのクォーツの村にしても、ラプチナ城から丸一日かかってようやくたどり着いているくらいだ。幸いなことと言えば、この世界にはファンタジー世界にありがちなモンスターなんて呼べるような獣は存在していないが、せいぜい人を襲う野生の動物や金目の物目当てで襲ってくる野党や山族はその辺をうろついている。

昨日だってそうだった。ほとんどボーっとしながら地図を確かめつつ歩いていたら、目の前から数十人の盗人連中が襲いかかってきた。有り金全部と手持ちの荷物、食糧を要求してきたまでにはいいが、相手がこの国を代表するプロフェッショナル集団とは知らなかったのがあいつらの敗因だろう。ジンの剣が切り裂き、アゲートの斧が破壊し、ドクターのメスが突き刺さり、ジェットの魔術で燃やしつくされ、虎眼の拳が全てを粉々に粉碎した。

呆気なく返り討ちにされた盗人連中から逆に有り金全部と食べ物と水、ついでに売れば金になりそうなものを根こそぎ奪い取った後に全員の身ぐるみをはぎ取って目の前の大岩にまとめてくくりつけてやった。これではどっちが本当の追剥か解ったものではないと、数時間後に救出された盗人の一人が泣きながら語った。

人から物を盗むのには理由がある。同様に、こちらだって盗まなければ生きていけない理由がある。全てはバランス良く、ちょうどいい具合に整っている物なのだ。

たがこいつらはそのバランスが著しく傾いているのがとても気になるが・・・ハッキリ指摘しようものなら即刻始末されてしまうことだろう。

そんなこんなであれから4日が過ぎた。無駄に長い距離を歩き通して、ようやく新しい村に辿り着くことができた。村の周辺をグルッと囲むように緑の豊かな森に囲まれたこの村の名は、「アイオ」と言う。

「やっと着いたさああああああ！！」

「飯いいい！！風呂おおおお！！まともな寝床おおおお！！」

肉体の限界から入口の前で奇声を上げたアゲートとジェットが後先き考えずに自分の斧と杖を放りだして宿屋まで駆け足で直行してしまった。

「ったく、ああのガキどもは」

草の上に転がされた杖を拾いながら、ジンはため息を吐いた。確かに村に着いたことは嬉しいが、あんなにはしゃぐ程では決してない。

「ドクター！ 私たちも早く行くネエエエエ！！！」

ここに来る途中から空腹を訴え続けていた猫眼が、アゲートの斧を担ぎながらこれまたとんでもない速さで飯屋へ直行してしまった。空腹の余りあの斧で何かやらかしたりしないか若干気にはなったが、できるだけ考えないことにしよう。

自分達のさっさと行こうと歩き出したが、なぜかドクターはそれに賛同せずさっきから振り返って森の方ばかりを眺めていた。気になるだけ気になって、一応尋ねてみた。

「・・・何やってんだお前？」

「キシシシ・・・小生、この森と村に関して妙な噂を耳にしているね」

「妙な噂？」

「いかにも。この森、正式には『アイオの森』と呼ばれているのだが、昔は『忘却の森』だとか『忘れられない森』だとか、おかしな呼ばれ方をされているそうなんだよ」

そう言って、ドクターはまた笑った。今日のドクターの笑い方は、いつもよりなんだか気味が悪い。

ジンも少し振り返ってこの森を眺めてみたが・・・。特にこれと言って変なところではない、ジンが住んでいた地元の森とほとんど同じ、ただの森だ。樹木と植物が生い茂り、上を見上げれば輝く木漏れ日が目に眩しくまるで光のカーテンが森全体に敷かれているような風景で、いつまで眺めていても飽きないような光景だ。

しかし、ハッキリ言ってこの森はただそれだけ。忘れられない森なんて言われを受けるには程遠い景色だ。この程度の景色、地元の山の中を捜せばいくらでも見られる様な光景にさえジンは思える。

「・・・何でそんな言われをされてんだ？」

「キシシシ、小生の知ったこっちゃないよ。それより小生も腹が減った、先に猫君と食事に行ってから宿へ向かうよ」

そう言うなり、ドクターはジンを一人置き去りにして村の中へ消えてしまった。

ジンはもう一度だけ森を眺めてから、後を追うように村へ入った。

このアイオの村は、クォーツの村よりの発展の見える村だった。石生の建物も多く、人の数もそこそこ、そして海が近いせいなのか、微かに空気の中に潮の香りが混じっている。青果市場はもちろん、この辺では珍しい雑貨屋までここにはあった。もちろん今日泊まる宿屋も、今までの中では一番きれいな宿なのと言うまでもない。

アゲート達が既に入っている形跡のある宿屋を見つけると、ジンはその宿の暖簾をくぐって入店した。今日の宿はシンプルで飾り気の少ない宿だったが、全室木造特有の木の香りが、ジンを迎え入れてくれた。飾られてある観葉植物の趣味もよさそうだ。

カウンターに座っていた恰幅のいいおばちゃんが「いらっしゃい」と声をかけ、見てみるとそこには3匹も猫が固まって昼寝をしていた。猫派のジンにはたまらない光景なのだが、ここではしゃいで自分のキャラを壊すわけにはいかないのでグッと辛抱した。

「ここにさっき、バンダナ男と黒いローブ着た奴が来なかったかい？」

「ああ、さっきチェックインして出て行ったところだけど？」

「そのツレだ。全部で5部屋欲しいんだが、空いてっかい？」

「あいよ任せな。ここんとこ客が少なくて暇だったんだよ、客は歓迎さね」

おばちゃんはカッカッカと笑いながら宿帳を確認してから部屋の鍵を渡してくれた。そのまま渡された宿帳に自分の名前と、ついでにここにはまだ来ていないドクターと猫眼の分の明記も済ましておいた。

「ええっと・・・このジンってのが、あんたか？」

「そうだけど・・・それが何か？」

「いやね、この村の風習でね。初めて見る人の顔と名前はしっかりと覚えるって妙な伝承が自然と続いているんだよこの村は」

ふうん・・・。まあ変わった風習であることに間違いは無いが、別に名前を覚えてもらったところでどうといったことは無い、気にしないことにしよう。

ジンは鍵を受け取って指差された部屋まで続く階段をトントンと昇って行った。

だがこの時、もっとこの風習に気を取っておくべきだった事に後悔をするとは思ってもよらなかったらろう・・・。

鍵を開けて部屋の中へ入った。総木造作りのこの部屋はベッドと花瓶の飾られて小さいテーブル、そして西向きに設置された窓しかない、とてもシンプルな部屋だった。ジンは早速ベルトに巻かれた二本の剣を外して部屋の隅に立てかけ、コートもテーブルに放り捨ててベッドの上に倒れた。すると何だか自然と大きなタメ息が出てきた。今までの旅の疲れもあるが、今は何かいつもと違う別の違和感を感じざるを得なかった。

窓を見てみると、外の景色は街並みの情景よりも、村全体を取り囲む森の方が圧倒的に目立っている。疲れた体を癒すヒーリング効果には最適なことだろう。

「うっほほーい！！まともな寝床さあああ！！ベッドさあああ！！フカフカさあああ！！！」

だと言うのに・・・・・・・・

薄い壁の向こう側から、今はできるだけ聞きたくなかったやかましいあのバカの大騒ぎが響いてきた。どんなにすばらしいヒーリング効果も、これで全て台無しだ。

一瞬目の中に自分の剣が映り、これを突き刺したら静かになるだろうかんと考えてはみたが、今はその考えは捨てた。今気になっているのは、ドクターがさっき話していた放していたこの森の逸話についてだ。どうでもいい筈なんだが、一度気になってしまうとどうしてもスッキリしない。何か喉の奥に詰まったような感覚が残されてしまう。

「忘却の森、か。・・・・・・・・調べてみるか」

ポケットにライターとタバコ、そしてわずかに入っている自分の財布を詰め込んで部屋を出た。ちょっと聞きに回る程度なので剣はいらないだろう。

ドアを開けると、ちょうど目の前でばったりジェットと遭遇することができた。ジェットは今ジと同様に上着のローブを脱ぎ捨て、白いTシャツ一枚の格好で歩いていた。

「よっ」

「おう・・・・・・・・これから出かけんのかオナベ？」

「名前で呼べっての、焼くぞ？シャワーも浴びたし、ちょっと気分転換に散歩するところだよ」

「え、性転換しに行く？」

「炭にするぞコラ！！」

訳を話し、一応協力を貰ったジンとジェットは村の中央市場の中を歩いていた。ジンはポケットに両手を突っ込んで煙草をくわえ、ジェットは腕を組んでとても不満そうな渋い顔をしながら。

「つつーわけで、いろいろ話を聞いて情報を集めてきやがれ・・・・・・・・」

「話は解った気がするがよう、何でアタシまでそんな事に協力せにゃならんのだ？」

さっき協力を貰ったなんて書いたが、本当はジンの無理やりとこじつけで否応なしに情報収集に参加させられたので、それでジェットはご機嫌斜めな訳だ。

もちろん今だってジェットの一言はジンの耳には入っていない。

「とりあえず二手に分かれた方が効率的だろ、んじゃよろしくなっと」

ジンはテキトーな所で別れると、イライラが最高潮に達したジェットを一人置き去りにして歩き去ろうとした。ジェットは頭に来て一発あのアホの頭をひっぱたいてやろうかと挑戦したが、呆気なく避けられてしまいジンは人ごみの中に完全に溶けて消えてしまった。

この村は人の数も多く、村と言うより町と呼ぶのに近かった。人も店も活気で溢れ、歩いているだけで元気を分けてもらえるような気分にしてくれる。まあ大きいと言ってもラプチナ城の城下町ほどではなかったが、ジンの耳を刺激するには十分すぎた。

・・・と、感心している場合ではない、今はとにかく情報収集だ。この森の逸話についてと、宝石に関する情報を得るという目的を思い出して、目の前にあった適当な店に顔を出してみることにした。

適当に暖簾をくぐった店は、野菜と果物を扱っている八百屋だった。店の中に入ったとたん、果物の独特な甘い香りが漂い備考をやさしく刺激して来店を歓迎してくれた。同時に野菜特有のにおいも相まって気持ちがなんだか落ち着いてきた。

店の奥から角刈り頭にねじり鉢巻きのおっさんが現れ、手を叩いて商売接客を始めてきた。

「へいらっしゃい！何をお求めで？今日は果物が安いよ！」

おっさんは商売用の作りスマイルで粋な接客をして来るが、ハッキリ言ってジンはこの独特のノリが苦手だった。このテンションを目の当たりにされる度、あのバカの顔（アゲートの事らしい）が視界にちらついてイライラさせられるからなのだが・・・それ以前に無駄なハイテンション無人間が嫌いなのも理由にある。

「あ～・・・買い物じゃなくてよう、ちょっと話を聞かせてもらいたいんだが・・・」

ジンは本題に入って早速このアイオの森のことについて聞きだして見た。しかしおっさん曰く、この森は綺麗な森で動物も住んでるし、季節になれば木の実や自生している野菜やキノコも採れる自慢の森、とだけ言っている。忘却の森について話を聞いて見たが、この森にそんな逸話があったこと自体おっさんは知らなかった。アイオの森は昔からアイオの森で、忘却の森なんてふざけた名前は生まれてこの方聞いたことが無いと証言している。もしそうだとすると、これはドクターの情報がミスってるのかも知れないと考えるだけ考えてみたが、あのドクターの話がウソだとも思いにくい。これはもう少しあちこちで情報を集めてみた方がいいかもしれない。森の話はここでいったん切り捨てて、次に宝石についてのことを尋ねてみたが、これもまたハズレだった。

「はあ・・・そうかい、ジャマしたな」

「オイ兄ちゃん、人にこれだけ喋らせておいてなにも無しってのは、良くないのと違うかな？」

「・・・はあ、わかった。」

ガッシリおっさんに肩を掴まれてしまってはもう逃げられない。ジンは仕方なく一番手近に転がされて山売りにされていたリンゴを一つ掴んでこれを買うこととした。財布から取り出した小銭をおっさんに手渡すと、上機嫌になってニカッと笑ってくれた。

「へいまいど、そうそうところで兄ちゃん」

「・・・今度は何買えってんだよ？」

「兄ちゃん、名前は何てんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ジンはこの時宿屋のおばちゃんがいていたことを思い出した。

『初めて見る人の顔と名前はしっかりと覚えるって妙な伝承が自然と続いているんだよこの村は』
・・・そういう事か。なんだか嫌な予感がしてきた。例えば、これから聞いて回る店先々で片っ端から人の名前を聞いて回られる・・・とか？

もしも本当にそうだとしたら・・・・・・・・

「最っ強に嫌なんだけどよう・・・・・・・・」

調査を初めてかれこれ1時間が経過した。ありとあらゆる店の店員やその辺のめぼしい人物に声をかけて聞き回ること35人。店で特に用も無い買い物をさせられること総額5480L。そして見ず知らずの他人に自分の名前を聞かれること35回。そしてめぼしい情報は、一つとしてなし。

もういい加減に嫌になってきたジンは人の眼から離れ、森の中を直接調査することとした。これ以上いちいち人に名前を聞かれるのはごめんだ。「あなたのお名前は？」なんて聞くだけでイライラして煙草の消費が激しくなってしまう。

しかし調べるとは言っても、何の情報の掴んではいけないので実質森の中を散歩する要領でブラブラ歩きまわるだけなのだが・・・。

タバコの灰で森が火事にでもならないように気をつけながらウロウロすること数十分、やはり何の手がかりも無ければ見つかることも見つからないのは当然の様だった。さっきから歩いても目に映るのは木と草と、食べそうな木の実とキノコと野生の小動物くらいだ。

しかしこの森は、なかなかいいものだ。歩いているだけでさっきから気持ちが楽になってくる。木々の香りと草や苔のにおい、温かい木漏れ日が身体を照らす度に、目がトロンとしてくる。そんな時だった。

ポロロンポロロンポロロン・・・

ポロロンポロロンポロロン・・・

森の中から、ハーブの様な音色が耳に聞こえた。この音はジンから見て右前方からだ。

纏う事無く音のする方向へ進んだ。生い茂る背の高い草を蹴散らしながら進むこと数十mも歩くと、急に視界が開けた。

まるで樹木がここに生えることを嫌うかのよう、一か所だけ木が一本も生えずに天然の広場様な場所に辿り着いてしまった。辺りを見回すと、この森にすんでいる動物達があ音に引き寄せられたかのように集結している。ウサギも、猪の、鳥も、リスも、何でも居た。

そしてその中央、動物達に囲まれるように切り株の椅子に腰かけ、小さなハーブを細く白い、滑らかな手で奏でている人物がいた。

近づいて見てみると、その人物は女だった。彼女はクリーム色のカーディガンを肩にはおい、目を閉じて演奏に集中していた。動物達は鳴き声一つ上げることもしせず、まるであの女のコンサートを聴きにきているようにじっと静かに耳を澄ませている。

ジンもなんとなく背後の木にもたれて腕を組み、煙をゆっくりと吸いながら女の演奏を見守った。この女の奏でるハーブの根は、何か引きつけるような不思議な魅力を感じさせる。

しばらく演奏に聴き惚れていると、程なくして心地よい気分になってきた。

淡い水色の光沢を持つ長い髪が風に揺られた時、演奏が終わったかのように指が止まった。演奏の終了を知った動物達は、それぞれ自分の寝倉へ戻るために散り散りに去ってしまった。ただ一人だけ、タバコを啜る大きな動物一匹を除いて。

「・・・あなた」

「・・・はい？」

自分でも解らないのだが、自然とジンは女に声をかけてしまった。女は眉を八の字にした笑顔でジンの声に応えてくれた。

「こんなところで何やってんだ？」

「ああ・・・特に、なにも・・・ですね」

そう言うとハーブを膝の上に置いて大きく伸びをした。指を組んで両腕を頭上へ伸ばすと、ジェットとどっこいどっこの胸が薄いワンピースに張り出して存在を主張した。

「フゥ、あなたは？」

「誰でもいいだろ。たまたま散歩してたらこっちかで何か音がしたからちょっと寄ってみただけだ。そう言うアンタは何なんだ？」

「私だって、誰でもいいです。ここで演奏をしている、ただの詩人です」

「・・・この村の人間なのか？」

「いいえ、ここへは好奇心で来ているだけです」

ジンはフーンと頷くと、背もたれにしていた木から離れて女の元へ近づき、お互いの背中を合わせるように切り株に腰かけた。ついでに新しいタバコを吸おうと思ってポケットから一本取り出したが、火を点けるより先に彼女に取られてしまった。

「タバコの煙はこの森の動物達全員が嫌っています。あなたの身体にも大変良くありません」

年上の姉さんが弟を叱るように言い放つと、叱られたジンは舌打ちをしてタバコと取り返し、仕方なくポケットに仕舞った。だが一度吸おうと思うと口がとても寂しくなってしまうのがスモーカーの心理。ジンは仕方なさそうにこの間ドクターから貰った禁煙パイプをくわえることにした。吸い込むたびに流れてくるハッカのなんとも味気のない事か・・・。

まずそうな顔をしてしばらく吸っていると、背後でクスクスと彼女が笑っているのが聞こえた。

「なんだよ急に？」

「いえ、なんだか面白い方だなんて思って」

「・・・ケツ」

バツが悪そうに吸い終わったパイプを吹き出した。

それからしばらくの間、二人は口を開こうとせず、ただ静かな時間が無駄に過ぎていくばかりだった。

そしてここでジンは自分の目的を思い出し、彼女にも聞いて見ることにした。

「・・・あのよう、聞きたいことがあるんだがいいか？」

「・・・？私の個人情報？」

「違う」

「スリーサイズだったら・・・」

「違うっての！」

それからしばらく彼女の天然ボケに付き合わされた後に、ようやく本題に入ることができた。この森の、「忘却の森」についての話と宝石の話だ。
だが森の話を持ちかけた途端、急に彼女の顔が曇りだした。
何か、悲しそうな眼をしている。

「・・・知っています、その話」
「そうか・・・詳しく聞かせてくれないか？」
「・・・」

彼女は何も口にはしない代わりに、首を左右に振ってこたえた。このサインはNOの印だ。チラッと彼女の手を見てみると、ハーブを握る手が震えていた。この震えが何よりの証拠、きっとこの森には何かとんでもない秘密、具体的にはとても恐ろしい真実があるのだろう。だがここまで怯えている女に無理やりにでも話を聞こうとするほどジンはバカではない。昔から大嫌いだった自分のオヤジの教え、「女性には紳士的で、かつ優しくあれ」に則りこの話は終わりにした。話題を変えて、自分達の旅の目的たる宝石のことについて聞いてみた。

「・・・巨大な力を秘めた宝石？」
「ああ、それについてはどうだ？」
「・・・」

どうやら今度も無返答のようだ。これも知らないと言う事は、もうここにいるだけの理由が無くなってしまった。

立ち上がろうとした時、彼女はハーブを持ち上げ、静かな調べを奏でだした。今演奏している音楽は、さっき聞いた曲とは印象がまるで違っていた。さっき聞いていた音楽を「楽」と例えたなら、今奏でているのは「哀」だ。

極を奏でながら、彼女は静かに、柔らかく詩を語った。

『昔あるところに、辺りを森に囲まれた美それは大層美しい村がありました。人の数は少なかったけど、村人は毎日努力して少しずつ人を増やし、建物を増やし、家を建て、物を集め、村は徐々に発展していきました。長い時間をかけて交流を深め、決して楽な生活とは言えませんでしたがとても幸せは暮らしができました。』

『しかしあるとき、その幸せを壊す存在が現れたのです。人々は恐怖を込めて、「悪魔」と呼ぶこととしました。悪魔は自分の欲望のままに物を壊し、人々を苦しめ、村を焼き払いました。』

『悪魔は自分の欲求を満たすと、自らの身体を引きずりながら暗い穴倉の中へ消えて行ったのでした。』

詩が終わり、ハーブを弾く指が止まった。彼女の目には、うっすらと涙がにじんでいた。今まで黙って聞いていたジンも、ここでようやく口を開くことができるようになった。

「・・・物語としては最低の話だが、実際に合った話だとしたらもっと最低だな」

「はい・・・この村で実際に起こった、大昔の話です。すでに村の人々は記憶と記録から消し去った、誰も覚えていない話です。あなたが求めている話と関係してるかどうかは解りませんが・・・」

「上等上等、あんがとよ」

ジンは新しく加えていたパイプを吐き捨てて立ち上がった。そしてそのまま今自分が歩いてきた道を巻き戻すように歩きだした。

「そんだけの情報がもらえりゃ後はこっちで調べられる。あばよ」

そうれだけ言い残し、首をコキコキ鳴らしながら立ち去ろうとした時、彼女がそっとジンの背中に声をかけてきた。

「あの・・・また会えませんか？」

「・・・あ？」

「明日でも・・・また、ここで」

「・・・もしここにオレが来た時にいるんならな」

ジンは振り向きもせず、ただその一言を残して姿を消してしまった。

「キシキシ、興味深い情報を持ってきてくれたねえ。大昔この村を襲った悪魔だって？」

「ああ、なんか知らないかなって思っよう」

ジンはあの後まっすぐに宿へ戻ると、ドクターの部屋へ直行して持ってきた情報を全て話した。ドクターはこの時ベッドに寝っ転がり本を呼んでいる最中だった。ついでに言うなら、この時猫眼はここにはおらず、今頃は部屋でグースカ眠って虎眼に変っているところだとか。

「キシキシキシ。どうだろうねえ。悪魔と関係している宝石は意外と数が多い。魔除けとかそういう意味合いも含めてだけどね」

「この際何日かけてのいい。できるだけ徹底して悪魔に関係している石について調べてもらいたい。もしかしたらその石が、」

「探している宝石かもしれない・・・と。簡単に言ってくれるね」

ドクターは心なしか嫌そうな顔をして本を閉じた。本をトランクの中に仕舞うと別の本を数冊、旅立ちの沖に支給されたほ席の資料とドクター個人の所有物の資料を取り出してベッドの上に広げた。

「まあ丁度いい。どうせ小生も暇だったんだ、調べてやるよ。キシキシキシキシキシ・・・」

言葉の割にはやる気のない返事に、一瞬カチンときたが起こるだけ無駄だといひ加減解っているのもそのままこれ以上何も言わずに部屋を出て行った。

時計を見ると、時刻はもう4時を回るところで、日も随分と傾いてきている。ジンは一瞬森で出会ったあの女のことをなんとなく思い出した。が、深く思い出そうとはせずにそのまま部屋へ戻り、ベッドに寝倒れした。

もう4日が過ぎてしまった。

あれからドクターは部屋の中にこもりっぱなしで、ジンの情報からひたすら手探り状態で手掛かりを調べ続けていた。憎まれ口を叩くような奴だが、一度責任を持ったらやり通す男の様でさすがにジンも感心した。

この間、アゲートは起きては食い、街を散歩しながら食べ歩きを日課とし、帰ったら斧の練習をしてまた食って寝る生活の繰り返し。

ジェットは主に本屋で立ち読みをして時間を潰していることが多い。

虎眼は暇さえあればすぐに身体を動かして自己の鍛錬を積み重ね、猫眼の時もトレーニングしていることが多いがジェットと喋っているのを時々みかけている。ドクターが相手にしてくれなくて寂しいと毎日ぼやいている。

そしてジンはといえば・・・

あれから毎日、決まった時間になると森の中を彷徨い、ある場所に行って音楽を楽しむのが最大の楽しみとなってしまっている。あの時であった森の広場で、動物たちと一緒にあって、背中合わせに座って彼女の奏でるハープに聴きほれる。本来ジンがここまで人と干渉するような行為は嫌いなはずなのだが、彼女だけに限り心を開いてしまっている。この音楽を聴いているだけでジンの心は水で流されるように静かになり、しだいに安らかな感情にさせてくれる。彼女の方も似たような気持で、いつも以上にハープを弾く指が柔らかくなる。

お互いに何を考えているのかも知らないし、お互いが誰なのかさえも全く知らないはずなのに、二人は好きで毎日こうしているのだった。

その日の夜

この数日間閉め切られていたドクターの部屋の鍵が解放され、メンバー全員が部屋の中に招待された。部屋の中はいつどこでいつの間に手に入れたのか知らないが、大量の本の山で散らかされて足の踏み場を探すだけでも一苦勞なほどだった。ドクターの顔意も悪そうに青ざめ、髪が跳ね上がっている。部屋に籠っている間食事も睡眠もろくにしていないと見えた。最初に頼んでいたジンはこれを見てさすがに悪いことをさせたのではないかと少し反省し、その証拠として部屋での喫煙を控えた。

「キシシシシシシ・・・小生は頑張った。メガネ君のくれた少ない情報から該当する宝石を小生は必死で探した。小生は頑張った」

大事なことなので2回繰り返して語った。

「その小生の働きのおかげで、確率の高い石の一つを見つけることに成功した」

「マジデさドクター!？」

「キ~~~~ッシシシシシシシシシシシシシシシ」

細かく針で刺すように耳を突いてくる様な笑い声を響かせながら、ドクターは一冊の本拾い上げ、開かれたページにある写真を指差した。

その写真に乗っている石の名は、「オニクス」とある。

「こいつって、確か・・・」

「キシシシ・・・コイツは現代では強い魔除けの石とされて名が通っている。しかして大昔、この石は悪魔を封じ込めた悪魔の石としても呼ばれていたそう。メガネ君の言っていた悪魔ってワードは、たぶんこいつに繋がるんだと小生は仮定した。可能性は比較的高い」

「流石はドクター、世界一さ!」

「それにオニクスっていや、ちょうどあたしらが探してる宝石の中にあつたよな?」

ジェットの言う通り、オニクスはこの度の目的である6つの宝石の内の一つである。もしうまくいけば6つの内の1つが手に入る可能性だってあるのだ。

「だとすりゃ、明日にでも早速搜索開始ってとこだな。探す場所の目星はついてんのか?」

「キシシシ・・・小生を誰だと思っている?見くびってもらっては困る。すでにその目星とやらは付いている」

ドクターはそういうと本で散らかっている足元に地図を広げた。この地図は国王から貰った地図ではなく、この街で買って来たこの町周辺の細かな地形を図面化した詳しい地図だ。昨日アゲートがドクターからお使いを頼まれていたのを覚えているが、こんな物を買わせていたのか。

ドクターはキシシと笑いながらジェットから拝借した杖でその場所を示した。そこはこの街の森を抜けてもそんなに離れていない場所だった。森を抜けてしばらく歩いた先に山があり、山を越えた先には新たな村があるのだが、その村とこの森を繋ぐためのトンネルがここに存在しているらしい。しかしそのトンネルはずいぶんと昔に崩れ落ち、すっかりトンネルが塞がれてしまってもう誰も利用はできないと後で説明してくれた。あの時彼女が話していた『暗い穴倉』がこのトンネルのことだとしたら、可能性は十分にある。

「よしわかった。明日の朝一にここを出ることにしよう」

ジンは全ての用事が済んだことを確認すると、一番に踵を返して部屋を出て行こうとした。そこを、入口に一番近い位置で壁にもたれて立っていた虎眼が呼び止める。

「気になっていたんだがジン……。お前、その情報をどこから仕入れたんだ？」

「……………別に」

お互い横目を合わせながら、簡単な一言のみで会話は終了してしまった。

虎眼には何か隠していることが明瞭だったが、これ以上何かを質問されることを恐れるかのように、ジンは部屋からさっさと出て行ってしまった。

おまけ

名前 ファントム・C (クリス)・タンザニヤ

年齢／性別 不明／♂

誕生日 5月18日 (牡牛座)

誕生石 ヒスイ (健康と繁栄)

レベル 41

性格 陰湿 陰険 陰気 陰鬱 恩着せがましい

職業 僧侶 (闇医者)

装備品 ワイヤーマス 黒い白衣 (黒衣)

好物 消毒液の匂い

嫌物 騒音 雑音

眼／髪 灰、タレ眼 (傷持ち) ／白灰髪、ショート

身体的特徴 前髪だけ異様に長く、顔を隠す

年齢の割に (年齢不詳だが) ひどくチビ

イメージカラー 白

楽器 鉄琴

備考 博学 様々な分野の知識と技術を持っている

「ドクター」が愛称 「氷」の魔術を操る

笑い方 「キシシシシ・・・」

希望CV 置鮎龍太郎 子安武人 飛田展男

翌朝

一行は荷物をまとめて、人が起きて働き出す時間よりも早くい時間に村を出発することにした。日も顔を出し始めたばかりで、森の中は薄い霧で包まれていたがこの森を抜けるのに難儀する様なくらいでは無かったため難なく森の外へ出ることもできた。その際、ジンはそわそわとした態度でしきりに森の中を見渡すように歩き、挙動不審気味だった。眠気のまだとれていないアゲートでさえ気がついたことで、一体何事なのか聞いて見ると本人は「なんでもねえ・・・」とだけ答えてあしらわれてしまった。

森を出てもジンの挙動はなかなか変わることが無く、一番後ろを歩きながらしきりにチラチラと森を見ながら足を進めている。

その落ち着きの無さに見かねた虎眼がとうとう口をはさんできてしまう始末だ。ちなみに昨日の集合の時も肉体は虎眼だったが、今朝猫眼の状態でジェットにたたき起こされた時に寝足りないとほざいた揚句、二度寝したために現在虎眼の身体をしているわけだ。まあ好都合だと言えれば好都合なわけだが・・・。

「さっきから何をしているんだジン？」

「あ・・・？いや、別になんでもねえ・・・」

あからさまなウソなのは全員が解っていた。普段からは考えられない不審な行動に、全員がジンを白い目で見ている。当の本人は平静を装ってタバコをくわえるが、ドクターに指摘されて上下逆さまに加えて火を点けてしまいそうになる有り様だった。

改めてタバコを正しく加え直して火を点けるが、いつも以上に全員の視線が痛かった。できるだけスルーする様に何も考えずに肺の中に吸い込んだ煙を大きく吐き出したりした。

20分も歩いたところで、例のオニキスが存在しているかもしれないトンネルの入り口までたどり着いた。高さと幅がそれぞれ5mくらいはある半月型のトンネルの穴は、数十m先が見えなくなるほどに真っ暗だった。

「うわ～、暗っれ～さ！何にも見えない！」

「どうやらこの先は大きくカーブでもしているんだろ。だからこれほどまで暗く感じるんだ。」

虎眼が先を行こうとするアゲートを止めながら説明した。確かにこのトンネルの奥はとても暗いようだ。外で野宿する時だってこんなに暗くはならないんだ。

さらに虎眼の超人的視力で測ってみたところ、このトンネルはかなり先まで深く掘られているらしいのだ。この先へ進んで、本当に出口が存在しているのかさえ不安になってしまうくらい、暗く冷たい闇がどこまでも続いている。まさに地獄への入り口と表現するに相応しいトンネルだった。

「しかしだけ暗いと足元も見えねえぞ、どうやって行くんだ？」

「こういう時のお前だろ生きたランタン。早く灯せよ」

ジンはあたかも自分の手下の様な素振りでジェットに命じた。ドクターとしても初めからこれを見越してジェットの炎魔術を当てにしていたのだが、命じられて本人は頭に血を上らせて激怒した。神聖なる自分の魔術をランタン代わりにされては自分のプライドに傷がつく、当たり前のことだ。

しばらくの間それで論争になった後、渋々杖の先に炎を灯してトンネル内を明るく照らした。ついでにジンはその炎で新しいタバコに火を点けてスパSPAと吸っている。これには再度憤怒した。

「とっとと確認して帰るぞ」

そう言ってジェットを先頭に、一行はトンネルの中に足を踏み入れた。

トンネルの中を歩いて最初に感じた感想は、とにかく本当に長いという事だった。深く掘られたトンネルの内部は左右に大きくカーブを繰り返す、すでに今入ってきた入口の光さえも見えなくなってしまうくらいだ。寄るよりも深い闇を照らしているのは、一つの炎の光のみ、全員その光を頼りに他探り状態で歩いている。

「んん～、やっぱり暗くて何にも見えないさあ」

「キシキシし・・・ハズレって可能性も考慮してもらわないと困るよ小生は？昨日話したことはあくまで小生の思いついた可能性だけの話なんだからねえ」

「ここまで来といてそういうこと言わないでくれよ、マジで」

ドクターの言う通り、もしここが宝石とは全く関係の無いトンネルだとしたら、完全に無駄骨もいところだ。もしそんな事実が発覚したら、さっさとこんなところからおさらばして村に戻るよう計画し直した。

そんな4人の不安を余所に、虎眼の目が暗闇の奥から何かを捉えた。見つけた直後に立ち止まり、それが何なのかその場で目を細めながらじっくりと鑑定する。

「どうかしたさ、アニキ？」

「・・・ハズレではないかもしれない、この先に何かあるのが見えた。10mくらい先を照らしてくれるか？」

虎眼の指示で先頭を歩いていたジェットが炎を操作し、杖の先から小さな火の球を飛ばして言われたとおりトンネルの先10m付近を照らした。

すると、虎眼の睨んだ通り、少し離れた場所に光に照らされて姿を現した物体がある。その正体は、雨水切れた大きな木箱だった。

「ん～、ただの木箱さ、ボロッボロの」

アゲートが先に言って木箱を確かめてみるが、特に変わった様子の無いただの古い木箱でしかなかったようだった。斧の先でツンツン突っついてもボコボコと叩いても何の反応も示しはしない。

しかし、そんなアゲート以外の全員は、木箱を目の当たりにした途端表情が一変して険しくなった。ジンに至ってはすでに二本とも剣を抜いて戦闘態勢にまで入っていた。

「ハレ？どうしたのさみんな、そんな怖い顔して」

「アホ、そこまで近づいてて気がつかねえのかよ？」

「その箱、おびただしく異常は気配を感じる」

虎眼もジンと同様に戦闘態勢に入りながらそう言った。

「異常な気配？」

「それだけじゃないぜ、モノ凄え魔力も感じる」

「キシキシ・・・小生もだ。常識知らずの力だねこりゃ」

ドクターとジェットも、その場から数歩下がっていつでも攻撃できるような姿勢を取っている。何のことやらさっぱりなアゲートは、ただ呆然として木箱に肘を置いて不思議そうに4人を眺めている。

そしてその時だ。この直後、アゲートは蚊の鳴くような声を聞こえた。

『・・・ドケ』

「・・・へ？なんか言ったさ？」

『ドケッテ言ッテルンダヨ！！』

今度はハッキリと大きな声で、まるで複数の人間の声が重なっているような濁った声が叫び上げた。その声は、今アゲートが肘を置いている木箱の中からだった。

突然、木箱全体がガタガタと震えだしながら全体に大きいヒビが入りだした。数秒と立たない内に全体にくまなくヒビが入ると、今度はバリバリと轟音を上げながら木箱が内側から爆発する様に破壊した。アゲートはいきなりの現象に対処しきれず爆発の勢いでゴロゴロと地面の上を転がされた。

木箱の破壊と同時に、その中から何かが飛び出してくるのがハッキリと見えた。

木箱から出現したのは、人間でも動物でも無く、強いて言うなら謎の「物体」と呼べる存在だった。なぜならそれは、この自然界では存在しているはずの無い姿をしているからだ。

出現した物体の形状は、せめてもの人型だった。全身がペンキをこぼした様に黒く染まり上がり、一对の螺旋状に生えた頭の角、腹をすかせた野獣の様に剥き出しにされた凶暴さを際立たせる牙と裂けた口。岩石の様に硬く大きく盛り上がった筋肉、大蛇の様にうねる凶悪な尻尾、全長は約3m。

まさに見た目は噂をそのまま実体化したような「悪魔」と呼ぶに相応しい化物が、ギロリと赤い眼玉を光らせてこちらを睨んだ。

『何者ダ手前ドモ？人ノ眠リヲ妨ゲオツテカラニ、目ガ覚メテシマッタデハナイカ！』

自分の存在を「人」と言っているのかはなはだ疑わしいが、今はそんな事を考えている場合ではない。この悪魔、何やらとてつもなくイラ立っている。話から連想するに、こいつは気持ちよく眠っていたところをアゲートがベッド代わりだった木箱を強く刺激したために目が覚めてしまい、無理やり起こされてとても怒っているようだ。その気持ちはよく解るが・・・。

兎にも角にも、どうやらコイツが昔アイオの村を襲った張本人にして、6つの宝石の一つであるオニキスに宿っている悪魔で間違いなさそうだ。

『コノオレノ眠リヲ邪魔スル奴ハ何人タリトモ許スツモリハ無イ！手前ドモ全員オレノ食事ニナッテモラウゾォォ！！』

起きたばかりでイライラしている悪魔は巨大な右腕を振りかざし、目の前にいる人達へめがけて撃ち放った。パンチの速度はそれほど早いと言えるものではなく、4人は難なく左右に跳んで回避することができ、空振りした拳は勢いをつけたままさっきまで立っていた地面を殴った。すると拳は地面にぶつかった瞬間、まるで全速力で走ってきた馬車同士が正面衝突を起こしたかのような大音響を立てて地面を砕いた。トンネルの中でこの音は耳に響き、全員思わず耳を塞いだり聞き苦しうに顔を歪めた。拳を食らった地面は大きく陥没し、辺り一面に大きな亀裂を走らせ

て割れてしまっている。

「ヒュ〜」悪魔の名は伊達じゃねえってことかよ」

「キシシ、どうしたもんかね」

ここまで巨大な奴の相手をしたことの無いジン、ジェット、ドクターは悪魔の実力に感服し、戦い方を急いで練り直した。ここまで相手がでかいとどう対処したらいいのか全く見当がつかないまま、悪魔の第二激が迫ってきた。今度目標にされたのは、虎眼だ。

隕石の様な拳が目の前まで迫ってきた時、虎眼はかすかに頬を釣り上げて笑った。そう、笑ったのだ。戦闘狂と言っても過言ではない虎眼にとってこれほどまでの戦い相手はいない。否、こいつは戦う相手ではない。

コイツは虎眼にとっての・・・

パァアアアアン！！！！

ただの練習相手に他ならない。

拳がぶつかる瞬間、虎眼が右手を正面に差し出すのと同時に澄んだ音がトンネル内に反響した。この音の正体は、飛んできた悪魔の拳を虎眼が右手一本で受け止めた音だ。地面を胡桃の様に簡単に砕いてしまう拳を、たった一本の腕で受け止めてしまった虎眼に全員が驚愕して目が飛び出した。それよりの驚いているのは、拳を放った悪魔本人の方だろう。

『バ、馬鹿ナ！！？コノオレノ攻撃ヲ、人間風情ガ受け止メルナンテアリ得ンノニ！？』

「人間は鍛えれば何だってできるんだ・・・こんなことだってなあ！！」

虎眼の表情が豹変すると、受け止めたその強大な拳を砕こうとするように小さな手のひらが握力をかけ始めた。そしてそのまま拳を鉤爪の様にガッチリ掴むと、片腕で握ったまま悪魔の身体を空中へ持ち上げてしまった。悪魔は若干悲鳴を上げながら、虎眼の頭上で逆さまになるまで持ち上げられてしまった。言うておくが、これは人間のできる所業ではない、驚愕の光景に皆開いた口が塞がらなかった。そしてそのままアタフタしている悪魔を全力で地面にたたきつけると、先ほどの悪魔の一撃にも匹敵する衝撃が悪魔の背中全体に集中し、これまた地面が大きく陥没してしまった。

「他愛もない・・・とにかく今だ、攻撃しろ！」

虎眼の一声で見が覚め改めて現状を確認すると、今悪魔はあおむけで倒れて無防備な状態だった。言われたとおり、攻撃を仕掛けるとしたら今しかないだろう。

剣を握り直し、雄々しく叫びを上げながら突っ込んだジンが、起き上がろうとする悪魔の両腕を擦れ違いざまに切り落とした。悪魔の肉体は固かったが決して剣で切らないような硬さではなく、感覚的には木を切るのに似ていた。

両腕を切り捨てられた悪魔は激痛に顔を歪め、傷口から人間の血にも似た黒い液体をドクドクと噴出した。お返しとばかりにジンを睨み、長い尻尾を振りまわして反撃を試みたが、この攻撃も命中することは無かった。尻尾を振り上げた直後、悪魔の両目がドクターの袖から伸びるワイヤーメスによって潰されてしまった。資格情報を失った悪魔の攻撃は狙いを大きく外れ、トンネルの壁に激突して終わった。

攻撃の手はまだ終わらない、一番後ろに控えていたジェットが片手で杖を振り回しながら呪文を詠唱している。時間が経つにつれて杖の先に仕込まれた魔皇石に光が宿り、次第に光は熱を帯び炎へ姿を変え、どんどん巨大化してゆく。

目の見えなくなった悪魔は、離れた所から何か強大な魔力があふれているのを感じるまで気がつくことができず、気がついたころには全て遅かった。

「燃え尽きろや！！」

ドボオオオオオオオオオ！！！！！！

炎系の上級魔術「ネグローニ」。杖の先端から巨大の炎の柱が襲いかかり、悪魔へ直撃した。火柱に飲み込まれた悪魔は炎の中で絶命の悲鳴を上げながら燃え盛り、ものの数秒ほどでグリルパーティーのメインを飾るのに相応しい焼け具合となってしまった。

全身が黒く焼け爛れ、トンネル内に焦げ付く嫌な臭いを放ちながら、悪魔はうつ伏せに卒倒してしまった。なにはともあれ、オニキスに寄生していた悪魔はこれで片付いてしまった訳だ、戦った時間はわずか数分足らず、あっという間の終焉であった。

「以外と手応えが無かったな」

「まったくだ。宝石に寄生している悪魔と聞いていたから、どれ程まで強いに興味を持っていたのにとんだ期待外れだった」

剣についた黒い血のりを吹きながら呟くジンの一言に虎眼がそう返した。期待はずれとは言っているが、倒された悪魔から言わせてみればお前の方が意外すぎたことだろう。

まあ手応えが無かったという点に関しては、いまだに箱の傍で気絶して目を回しているアゲート以外の全員が共感していることだろう。ドクターに至ってはつまらなそうにさっきジンが切り落とした腕をメスで突っついて遊んでいる。

「本当、やりがいがないわな。ってかマジ弱くて拍子抜けだぜ」

「キシキシ・・・茹でたキャベツよりあっさりだったね。正真正銘のバカはまだ寝てるし、キシキシキシキシ」

ドクターの表現の意味は良く解らないが、まあいつものことだからいい。ドクターは倒れたままのアゲートをほったらかしにし、悪魔が出現した木箱を調べに入った。

壊れかけた木箱の中へ手を伸ばし、その中から出てきたのは黒い「球」だった。表面は光が淡く包み、光が一本の管の様に伸びて今倒れている悪魔と繋がれていた。

これを見てドクターは悪魔の力の源を理解できた。蛇口と水を撒くホースを思い出してほしい、つまりホースの先端がこの悪魔であり繋がれた蛇口がこの球と言う訳だ。

ドクターはその球を一度地面に置いてからじっくりと鑑定を開始した。

「・・・どうなんだドクター？」

「キシキシ、おそらく間違いない、これはオニキスだよ」

ドクターの口から告げられた鑑定結果に、皆が安堵した。

「よし、じゃあ早速持ってこんな所からさっさとおさらばしようぜ」

「キシシ・・・そりゃ無理だ」

一仕事終えた一行に、ドクターがなぜか否定的な発言をとった。しかもわざわざ置いたオニクスから数歩離れてゆく。

「何がいけないってんだよヤブ医者」

「ドクターと呼び名メガネ君。小生の予想では、こいつはまだ死んでいない」

そう言って指差したのが、さっき丸焼きにして死んだ悪魔の亡骸だった。一体何の事だか解らなかつたが、次の瞬間に全員が全てを理解できた。

切り落としたはずの両腕が、突然モコモコと動き出した。さらに今さっき炭になったはずの悪魔の身体の表面が泡立ち、元の筋肉の色を取り戻している。腕と切断面が合体した瞬間、メスで潰されたはずの両目が鋭い光を放った。悪魔はまだ死んではいない、悪魔は今ここに復活を成し遂げて立ち上がったのだ。

『グハハハハハハハハ！！ソコノチビノ言う通りダ。オレハソノオニクスニ封印サレテイル悪魔デ、ソノオニクスガコノ俺ニ魔力ヲ送ッテイル限りオレハ死ヌコトガデキナインダヨ！！』

復活そうそう威勢よく笑い上げた後、再び悪魔が攻撃を仕掛けてきた。今度は両方の拳で虎眼を狙って撃ち放たれた。しかも攻撃は一発で終わることは無く、スピードを点けて何発も何発も連撃で全員を襲った。ジンには剣を抜く暇すら与えず、回避に集中しているせいで呪文が使えないジェットと近づくことさえできない虎眼は苦虫を噛み潰した様にまずそうな表情を浮かべながら左右前後に跳び跳ねた。

『誰ガ手応エガ無イッテ！？何ガ拍子抜ケダッテ！？本格的ニ頭ニキタゾ、貴様ラ全員潰サレテ死ンデシマエ！！』

最早暴走にも近かった。オニクスの悪魔は自らが繋がれているオニクスから今まで以上に魔力を供給し攻撃の威力、拳のスピードともに飛躍的に加速しながら4人を襲い続けた。こうにまでなってしまうのは虎眼でも手がつけられない有り様になってしまう。ここはいったん引くべきだとは思ったが、ここでニエダしたら今度はこのトンネルその物を破壊して生き埋めにでもしてしまいかねない。どうしたらいいものやら現状の打開策が全く頭に思い浮かべることができなかつた。その場で自分の身を守るので精いっぱいだった。

「クッソ！オイオナベ、またさっきみたいに派手に燃やせねえのかよ！？」

「無茶言うな！！あの呪文には詠唱が必要なんだ、そんな暇はねえ！！」

最早八方塞がり。恐ろしい魔力を秘めた宝石の底力を明らかに見くびっていた。ここでまさか死んでしまうのだろうか・・・？

そんな最悪のシナリオが全員の頭の隅に思い描かれた時、救世主となる男が立ちあがった。

ザク！バチンッ！！

拳を振り尾をす音とは明らかに異なる全く別の音が、トンネルの中でやけにでかく反響した。不審な音に気付いた悪魔も攻撃の雨が止まり、音の下方向を向いた。

音がした場所は、ちょうど悪魔の背後からだった。そして振り向いた先にある現実を目の当たりにした瞬間、悪魔の表情が一変する。

背後に立っていたのは、ついさっき気絶から目が覚めたアゲートだった。アゲートは今、斧を振り下ろして刃が地面に突き刺さった状態でこちらを見ている悪魔と眼が合い、ポカンとした表情をしている。

アゲートはたった今、切り離したのだ。向かって右方向にはオニキスから伸びる黒い帯、反対には悪魔と繋がっている帯。魔力の供給を果たす一本に帯を、斧で簡単に切断してしまったのだ。意外な奴（忘れてた奴）の助立ちで、状況が一気に変化してしまい悪魔はアングリと口を開けて顔面が青ざめてしまった。

「えっと・・・なんかヤバかったさ？さっき聞こえたんだけど、オニキスと繋がってれば死なない的な？だったらこいつ斬っちまえばって思ってさ・・・意外と簡単に斬れたけど」

しばらくの間トンネルの中が静寂で静まり返り、沈黙を破ったのはもちろん立場が反転した悪魔の方だった。

『NOOOOOOOOOOOOOOOO！！！！』

悪魔はあまりにも呆気なさすぎる展開に我を忘れ、頭を抱えた。それは当然だろう、この宝石に封印されて幾年月、ようやく目が覚めたと思ったら早速命の危機だ。誰だって慌てるに決まっている。

「よくやったぞ！！それでこそ俺の弟分だ！！」

「おお、アニキiiiiii！！」

義兄弟同士で熱血な握手を交わすのは勝手だが、そういう事は余所でやってほしく思う一同だった。

『貴様ヨクモヤッテクレタナア！！絶対ニ殺シテクレルウウァア！！』

自暴自棄になった悪魔は残された力を振り絞り、狂ったような奇声を上げながら悪魔はその場から逃げるように走り出した。

どんな結果であろうともせっかくの勝機、逃す手は無い。一番手が空いていたジンが後を追うように走って逃げた悪魔を追いかけて出口へ向かった。

「逃しゃしねえぞコラ！」

悪魔は最後まで笑いなあ柄この世から蒸発する様に消えてしまった。

呼吸を整えたジンは、さっきまで悪魔が倒れていた地面を蹴ってみた。だが茶色い土埃が上がるだけで、特に異常は無い。

なんとなく空を見上げれば、いつの間にか空は分厚い雲で覆い隠されてしまっていた。これは放っとけば雨になることだろう。

それからしばらく経って、ようやくドクター達が追いついてきた。話によるとあれから悪魔と切り離されたオニキスは光を失うのと同時にとても軽量化され、今は胴たーがトランクの中に保管しているとのことだった。

「いや～とにかく早速宝石が一個手に入ってよかったさ～」

「だな。おいジン、今日は人雨きそうだからよう、予定変えて今日は宿でもう一泊してから晴れた日に出発しようぜ」

「……ん」

ジンの表情は、さっきから全然浮かばれていなかった。悪魔も倒したし、オニキスも手に入ったし、何が不満だと言うのだろうか？

理由はさっき悪魔が死に際に放った一言のことだ。

「誰も知らなければ消える」、悪魔は確かにそうっていた。しかし実際はどうだろうか？こうやって見渡して見ても、誰一人消えたりなんかしていないではないか。

「消える」、「誰も知らない」

このキーワードがさっきから妙に胸の奥に引っ掛かってスッキリしない。一度ここは整理した方がよさそうだ。

悪魔が放った一言から、発想を多角的に捉えてトレースしてみることにした。

誰も知らない → 人の名前がわからない？ → 誰なのか知らない → 知らない → いない → 存在しない → 存在していない → 誰も存在を知らないが故に消え……

「……は？」

この瞬間、何かが糸に繋がった気がした。そして同時に謎が残酷な真実に到達した途端、ジンの胸に何か言い知れない嫌な予感が駆け抜けた。

こんな知りたくもない予想がもしも本当だとしたら、「アイツ」はどうなんだ？確か名前は……。

「まさか……」

「……キシ？」

「マズイ！！！」

良からぬことが頭の中に入ってきた瞬間、居てもたってもいられなくなり真実を確かめるためにジンは森の中へ走り出した。

「オイオイオイ急にどうしたさ！？」

「どこへ行く気だジン！聞いているのか貴様あ！！」

今のジンには、もう何も聞こえなかった。果たすらに走り続け、必死になって駆け出し、なにがなんでも行かなければならない。

もしかしたら今もいるかもしれない。あの「場所」に「アイツ」が。

心臓が破裂しそうになるまで走った。呼吸が止まったって構わない、ただし足を止めることだけは許可しない。

見慣れた景色、知っている木の生え方、人しか知らない森の広場、ようやくここに来ることができた。辺りにはいつもたむろしている動物達の姿はどこにもなく、代わりにいつもの場所にあの彼女がいつも通りに腰かけていた。

しかし、たった一つだけいつもとは違う個所がある。それを認めてしまったジンの表情は絶望の色に染まってしまった。

ジンが見た光景、それは・・・彼女の身体が、爪先から少しずつ煙の様に立ち昇って消滅しかけていた。そんな光景だ。

「あ・・・んた・・・まさかだろ・・・？」

信じたくもない現実、夢なら覚めて欲しいとこの時生れて初めて思った。ジンは立っていられるだけの力を失い近くの木にもたれてしまった。

現在進行形で消えかけている彼女は、なにも言わずにじっと目を閉じて俯いている。

「わかったぞ。この森の秘密、「忘却の森」の意味」

ジンは震える声で、今自分が理解したことを話し始めた。

悪魔がさっき言った「誰も知らなければ消える」という言葉の意味は何なのか？己の存在を示すものは『名前』と『顔』、この両方を誰かに覚えてもらう事で人はこの世に初めて『存在している』ことになる。重要なのはこの『名前』と『顔』だったのだ。どういう理由なのかは知らないが、この森ではアイオの村に住んでいる村人の誰か一人にでも自分がここに存在していることを知ってもらう事で初めてこの世に『存在』していることとなる、自分がこの世で生きていることの証明となる。

ではもし、誰にも名前を告げなかったらとしたらどうだろうか？

結果から述べれば、そいつは『存在しない』ことになる。存在しない、誰も知らない、なにも無いそれは死んでいるのと同じ。『生きていない』から『死んでいる』、もしあの悪魔がその理論を利用してこの森、もしかしたらこの奥の村にまで魔力を注ぎ込むことでその定義が発動したとしたら、『存在していない者は全て消え失せる』。

だって誰も知らないのだ、この世から消えてなくなったとしても誰も困るような事など何一つとしてない。

存在しない者は消える、さっき消えてなくなってしまった悪魔と同じように・・・

彼女は黙ったまま静かにジンの話を聞き終わると、わずかに手を伸ばしてパチパチと力の無い拍手を送った。顔は微笑んでいるが、今日の笑顔には今まで見てきたような温かみは一切ない。

「お見事です・・・よく解りましたね」

「あんた何でなんだ？知ってたんだろこの事を。解ってた上で何でこんなことをしたりしたんだよ！？」

悪魔がこの森に魔力を注いだのは予定外の事件だったとはいえ、彼女は確かにアイオの森の住人にも、もちろんジンにもまだ名前を名乗っていない。だから存在していないから消えてしまうのだった。

冷静さを失ったジンは何も考えられなくなり、力任せに彼女の肩を掴んで問いざたした。

「・・・私の家族は、昔この村で暮らしていました。私がたまたま村の外に出て働きにしている最中、事件が起きたんです」

彼女の予想もできなかった意外な発言に目を見開いた。まさか彼女が、このアイオの村の出身だったとは・・・。

「ってことは、まさかその事件って・・・」

「そう、悪魔によって村が破壊されたんです。しかも村に戻って皆に話しかけても・・・誰ひとりだって私のことを覚えていなかったんです。私の事どころか、何で村が崩壊したのかその理由さえ誰も知らないと言っているんです・・・。生き残った私の家族も、私のことを覚えていませんでした。」

ここまで来てようやく話が見えてきた。あのオニキスの悪魔は村を好き放題ぶっ壊した後、わざと生かしておいた村人全員に何かをして『記憶』を全て消し去ったのだ。自分の存在、村の破壊、そして村の外の部外者も、すべて消し去った。

「あれから村を出て調べました。記憶を操る魔術、村を襲った悪魔・・・この数年で解ったことは魔力を持った古代の『宝石』に関する事だけでした。復讐もしたいけど私には力が無すぎた。ならばせめて、今はもう亡くなっている家族と同じ場所に行きたくて、ここに戻ってきたんです」

彼女が今まで誰にも名前を教えなかった理由が、自殺。つまりはそういう事だったのだ。村には帰らず、期を狙って自分の存在を消して家族の元へ旅立ちたいのが彼女の最後の願いだったと聞かされ、ジンは力を失った。話している間にも魔術の効果の侵攻は進み、すでに下半身はこの世から消え去っている。

「独りで静かに死期を待つつもりだったんですけど・・・あなたと出会ったことが、私の誤算でした」

「・・・オレが？」

「あなたと出会わなければ、私はもう特にこの世から消えていた・・・。その決心をここまで鈍らせてくれたのが、あなたです」

正直な話、彼女はあの時に自殺をしてしまうつもりだったのだが、それを止めたのが偶然現れたジンだったのだ。しかもなぜかジンと会う事がいつの間にか楽しみになり、ズルズルと自殺をする決心をここまで引きずって来てしまった。人との関わりを完全に断ち切っていた彼女にとって、ジンは初めての『交流』だったのだろう。

一緒にいるのが、楽しくて仕方無かった。

「なあ、何とかならねえのかよ！？あんたが消えなくてすむ方法はよう！！」

肩を掴む力が強くなり、彼女の肩を締めつけてきた。ジンは生まれて初めてだった、ここまで誰かを助けたいという気持ちになったのは。人前でこんなにまで取り乱し、焦りを見せることだって初めてなんだ。

ひょっとして、今彼でも名前を教えてくれれば魔術の効果が消えるのではないかと提案したが、彼女自身が首を横に振ってそれを否定した。

「いいんです・・・どうせ私は誰にも知られていない存在。私一人が消えたところで、誰も悲しみなんかしません」

「全然よくねえに決まってるだろバカ野郎！！！」

突然体が震えた。いきなりジンが聞いたことの無いような大声で叫ぶものだから、バランスが崩れて倒れそうになる。

「いるぞ、目の前に・・・悲しむ奴がよう・・・」

肩を掴む腕が震えてきた。

雨が降ってきたのだろうか、ジンの顔に一滴の水が落ちて流れ落ちた。しかもどういふ事なのかこの雨、目元にはばかり集中して落ちてきやがる。左右に一滴ずつ、わずかな雨が。

「教えてくれよ・・・あんたの名前」

「今から名乗ったところで、もう手遅れです」

「そうじゃねえ！何も知らないで目の前から消えるなんて御免なんだよ。・・・オレはジン、ジン・K・ジェイド」

声がガタガタに震えながら、ジンは自分の意思で、彼女のために教えたいから自分の名を名乗った。

啞然とした彼女の顔にも、雨が落ちてきた。とうとう小雨から本降りになってきたようで、目の前が滲んで見えなくなってきた。

「・・・ありがとう・・・ございます・・・」

彼女の肉体はほとんど消えてしまい、いよいよ残されたのは肩から上のみだ。

「……言ってくれよ……名前」

「はい。……私の……私の、名前は……」

とうとう雨が降ってきてしまった。勢いは強くないが小粒の雨がザーザーと森の上へ降り注ぎ、今この森を走っている人間達を濡らす。

一体どこへ行ってしまったのだろうか？いきなり森の中に消えてしまったジンにおいてけぼりを食わされた4人は現在行方不明になったジンを捜索している最中である。大きな森ではないが、この雨のこともあり体力の消耗が激しいのが辛いところだ。

「ハア、ハア、オイ見つかったか？」

「ダメさ兄貴！こっちには居ねえさ」

「キシシ、こっちにも見当たらないねえ」

「アタシもダメだったわ！」

「クソっ！あのバカ、一体どこへ消えてしまったんだ！？」

全身がずぶ濡れになり、足は水浸しの泥まみれ。4人で探し回ってもまるで成果が無い。虎眼も疲労が溜まってイライラが積もりっぱなしだった。

「仕方ない、もう一度探すぞ。もっと広範囲に広がって探して、限界を感じたらまたここだ、いいな？」

「アイアイサー！」

底なしに元気なアゲートの返事を合図に、再び4人が散らばった。あのバカが何を思って走りだしたのか知らないが、もし見つけたら只で済ますつもりは毛頭無い。何かしら処罰することを心に誓った。

ちょうどそんな時だ。

虎眼の耳が、雨の音に混じって何か別の音を聞き分けた。ドサリと何か落ちるような音だ。音は意外とすぐそこ、少し歩けばたどり着くことができる場所だったのが幸いだ。木の迷路をくぐりぬけ、草をかき分けた先に辿り着いたのは、まるで人工的に作られたかのような木の一本も生えていない天然の森の広場だった。

そしてその広場の中心には、良く知っている男が切り株の上に腰かけてうなだれているのが見えた。昔どこかで見た彫刻像の様だったが、その時見たものと違うのはこいつが生きていることと、片手に小さなハーブを握っていることぐらいだ。

たった一人で寂しく雨に打たれているジンは、濡れた前髪で顔が隠れている。

「やっと見つけたぞ。貴様こんな所で何をしているんだ？」

機嫌が明らかに悪い虎眼は、まるでヤクザの様に言葉が荒らいでいた。しかしジンはまるで聞こえていなかったかのように何の反応も示さず、ただじっとその場でうなだれ続けている。反応一つなし、声もかける様子無し、あまつさえこちらを見るようなことも無しときた……。虎眼の怒りの沸点が、一気に湧き上がってしまった。

「聞こえているのか貴様！！？」

ズンズンと近づくなり、ジンの胸ぐらを片手で掴み上げて睨みつけた。だが、それでもジンは何のアクションを見せつ気配が無い。

「・・・」

「・・・・・・・・オイ！！！」

何度身体をゆすっても、2～3発殴って眼鏡が落ちたとしても、何の反応も無い。まるで抜け殻のようにどこか遠くを見ているような、あるいは何も見えていないような眼をしている。虎眼の怒りが最高潮に達し、舌打ちをして思わずジンを放り投げた。受身の一つもとれていないジンは泥水に頭から突っ込み、耳の中に泥が入ってくる感触を感じた。

「人に散々迷惑をかけておいて、揚句これか！？何があったのかは知らないが、貴様がそうしたいと言うのなら気が済むまでそうやってボロ雑巾の真似でもしている！！俺達は宿に戻らせてもらうからな！」

最後通達を伝えた虎眼は踵を返し、再び歩いてきた道を歩き直した。しばらくすると遠くでアゲート達の声が聞こえ、怒りに狂った虎眼が搜索を打ち切り、宿に戻ることを伝えて足音が消えてしまった。

ザーザー・・・ ザーザー・・・ ザーザー・・・

森全体が雨の降る音のみで静まり返ってしまった。そんなとき、ジンの顔にまたあの雨がポツンと落ちてきた。さっきから不思議に思っていたのだが、この雨は今振っているあえとは何かが違う。目元ばかりに落ちてくるし、なぜか知らないが流れてくる度に雨が熱湯のように熱かった。

そうか、やっと思い出した。

「これが・・・涙か」

当初の予定では、オニクスを手に入れた後そのまま新しい村へ旅立つはずだったのだが、雨がさっきよりも強くなっていることとジンの捜索とで予定がダダ狂いしてしまっている。アイオの村の宿屋の玄関で濡れた服を絞りながらアゲートはそう考えた。

「いや～寒いったら無いさ～。おばちゃん、悪いけどタオルと一緒に温ったかい物ちょうだい！」

「あと風呂も沸かしてくれ～」

「ハイハイ。しかしあんたたち、朝から姿が見えないと思ったらこの雨の中どこほっつき歩いてたんだい？」

「キシシ・・・野暮用さ」

ジェットはタオルで濡れた体を包むと、おばちゃんから受け取った着替えを持ってさっさと部屋へ上がってしまった。ドクターに至ってはタオルを首に欠けてはいるが、自分の事よりトランクの方が心配の様で今中身を出して確認作業に没頭している。

「ヒィ寒みー寒みー。とっとと風呂入ないと風邪引いちゃうさ！」

「・・・・・・・・」

「ええっと・・・ジン、今頃どうしてるかな～？」

「本人に聞け・・・」

帰ってきてからと言うもの、虎眼の機嫌が明らかに悪くなっている。さっきから話しかけても無視するかきつい言葉が返ってくるかばかりでなんだか怖くなってくる。虎眼は自分の憤りをぶつけるかのように、脱ぎ捨てた上着をきつく絞り上げている。

正直早く帰ってきて欲しいのだがジンは未だ行方知れずだし、兄貴は怖いし、もう散々だ。

そこへ・・・

ドカンッ！！！！

乱暴に玄関が開かれ、外から誰かが入ってきた。それは息を荒らげ、全身がアゲート達以上にずぶ濡れになったジンだった。さらになぜか目が赤く腫れているうえに、体中泥誰けで片手には何か黒い石を握っている。

「ジン！ やっと帰ってきてくれたさ〜」

「…………… ッチ！ 貴様今の今まで一体に何をして」

「オイ、ドクター！！」

ジンは目の前を塞いでいる二人を押し分け、ブーツも脱がずにロビーに上がりトランクの濡れてしまった中身を拭いているドクターに握っていた黒い石を差し出した。

「…………… キシ？」

「この石、何だか解らないか？」

目の前に突き出された石と、あせった表情をしているジンの顔を交互に見比べた。ジンの表情は今まで見たことが無いくらい真剣な眼差しをしている。

ジンの心境を悟ったドクターは何も言わずに石を受け取ると、早速本を広げて鑑定を開始した。しばしの間、ロビーには雨の打ちつける音と本をめくる音だけ鳴り、誰も口を開こうとはしなかった。

そしてページをめくる手が止まったとたん、ドクターの眉間に一本のしわができた。

「…………… メガネ君、君はどこでこんな物を見つけてきたんだい？」

ドクターは石を持ち上げてジンに尋ねた。その表情は、「あり得ない」、「信じられない」と訴えているように見えた。（実質顔なんか見えないがなんとなくだ）

「あの森の地面からだ。5 mも掘ったらそいつが出てきたんだ。それはたぶん森全体…………… 違うな、この村の地下まで広がっているはずなんだ」

「キシキシキシ…………… な、る、ほ、ど。そういう事かい」

ドクターは石を投げ返すと、自分一人が理解しただけで気味悪く笑った。

「なあ、その石なんなのさ？」

「こいつの名は『ジェット』。別名黒琥珀と言ってね、大昔水中に涼んだ銃コクなんかが圧縮されてできた木の化石みたいなものさ。磨くと光沢が出て、アクセサリなんかにも加工されている。」

開いた本を3人が見やすいように広げながらドクターは説明した。本に載っている写真のジェットは、ネックレスという姿に変わって紹介されており、色は全てあの時のトンネルの暗さを思い出させるような漆黒で不透明だった。

「こいつとこの森と、なにが関係ある？」

「キシシシ・・・知らないようだねえ虎君、この石に込められている石言葉の意味を？」

「もったいぶらずに言え、ドクター！」

ジンは差し出された本を乱暴に払いのけると、なにを焦っているのかドクターの胸ぐらを掴み上げた。今日のジンはいつものジンらしくない行動でいっぱいだったのは知っているが、ここまで来るとこいつが本当に自分達の知っているジンなのかが疑わしくなってくる。それほどまで今日のジンはおかしかった。

「キシシシ・・・コイツの石言葉は・・・『忘れ去る』」

ドクターの呟くような声が告げた真実は、今のジンにとって衝撃的過ぎた。思わず目がカッと見開かれ瞳孔が開いたかと思えば、程なくして胸ぐらから手が離されてしまった。

「さっき思い出したんだが、この石にも力が合ってるね。魔力を流し込むと言っている記憶を消す作用があるんだ。麻薬的な扱いを受けて、使用は特別な許可が無い限り禁止されているがね。君達にだってあるだろ、忘れてしまいたいような黒歴史が？」

ジンが持ってきた石ころ一つでも十分に記憶を消去する力があるらしい。もしも、この村と森銭気にこの石が埋められていたとしたら、それを知っていてあの悪魔が魔力を流したとしたら人の一人くらい……いや。

もうこれ以上考えたくない。知りたいことを全て知ってしまったジンは手の中からジェットのをとりこぼし、背中を丸くしたまま自分の部屋にトボトボと戻ってしまった。

「……？なァドクター、その石と森と、何の関係があるのさ？」

「キシキシキシシ……小生は疲れた、よく勘のはたらく君の兄さんにでも聞いてみるがいいさ。キシキシキシシシシ……」

ドクターも同様に、荷物をまとめると部屋に戻るため階段を上って行ってしまった。

その後アゲートは言われたとおりに虎眼に質問攻めを繰り返したが、虎眼は何も教えてはくれなかった。

真意は逆、知ってしまったからこそ、知らない人間には教えることができないのだ。

『忘却の森』『忘れられない森』の本当の意味とは、『決して人のことを忘れてはならない』という意味なのだろう。忘れてしまったら最後、誰かが不用意に魔力を行使し瞬間にこの世から消えてしまう。それをさせないために、村人は初めて見た人間の顔を名前を覚えておくと言う特殊な風習を作った。

しかしある日悪魔が村を襲い、人々の記憶を消すのと同時に、『忘却の森』を忘れてしまったのだ。

全ての事が終わったその日の夜、夕飯の時間となって全員が食堂に集合してもやはりジンの姿だけが無かった。あれから何度かジンの部屋へ足を運んでは見たものの、鍵をかけて部屋の中に引きこもり声をかけても全く反応を示そうとしなかった。今晚の食事は、誰も会話のための口を開くことなく無言のまま実につまらなく終了してしまった。何度かアゲートが場を盛り上げようと奮闘するも、全くの逆効果となって余計に空気が寒々しくなるばかりなのでやめることになった。

夜が明けた。

この日の朝食も、皆揃いにそろって無言だったのは言うまでもあらず。もちろん時間を過ぎて
もジンの姿は無かった。

一番に食べ終わったジェットが食器を返して部屋へ戻ろうと食堂を出た。もうこんな空気はごめ
んであり、一刻も早くこの村を出発したい気持ちでいっぱいなのだが、ジンが動かなければそれ
は叶わない。思わずため息が出てしまった。

とそんな時に、食堂の入り口で人と肩がぶつかってバランスを崩しかけてしまった。ちょっとム
カついてぶつかった相手を睨むと、その人物は意外なことに、引きこもっていたはずのジンだ
った。

「あっ！テメエ・・・」

「悪いなジェット、今日の朝飯は何だ？」

「え・・・？えっと、パンとスープとサラダ・・・あとソーセージくらいだけど・・・」

困惑するジェットを余所に、ジンは食堂の中に吸い込まれて行った。それはあまりにも突然過ぎ
るでき度とだった、今まで自分のことは『オカマ』か『オナベ』くらいしか呼ばれたことが無か
ったはずなのに、今日になって急に名前呼びだしたのだ。

その驚愕はまだ飯を食っている残りの連中も同様だった。全員食う手が止まって、ただ呆然と自
分の分の朝食を受け取っているジンに視線が注がれている。ジンがいままだジェットの座ってい
た席に腰を落とした時なんかは、腫れものか爆発物を目の前にしたような目になっている。

「・・・メガネ君、もう大丈夫なのかい？」

「まあな。一晩ボーっとしてようやく踏ん切りがついたってとこだ」

ジンは呆けた顔をしている連中を差し置いて、あくまでいつも通りに焼き立てのトーストにかじ
りついている。一体どうしてあんなに落ち込んでいたのかは知らないが、とにかく今は元のジン
に戻っていてアゲートはホッとしていることだけは確かだ。

「ジン、昨日何であんなに閉じこもってたのさ？飯も食わないでさ～、まあオレっちがジンの分
まで食っといたけど」

「ありがとよ。その辺に関しては触れて欲しくない気分だ」

「私も結構気になってたけど、聞かない方がいいのかな？」

「そういうこと。意外とデリケートなのよ、オレは」

とてもそうには見えないが・・・まあ本人が言うのなら放っておこう。

とにかく、ジンは昨日からの空きっ腹にありったけの食材を放りこみながら話を続けた。

「ところで、今日の予定だけどう、飯食ったらすぐにこの村出るぞ」

「キシシシ・・・随分と急だねえ？」

「目的の宝石だって手に入ったんだ、もうこの村に用はねえよ。知らない奴に顔合わせるたびに名前聞かれるのもいいかげんウザったらしいしな」

「オレっちは結構気に入ったけどなあ、この村」

「じゃあお前はここに残って一生暮らしてろボケ」

「冗談がキツイさジン・・・」

どうやら本当にいつものジンに戻っているようだ。アゲートの簡単なジョークにも本気になってキツイツッコミをしていることからドクターはそう思った、もう大丈夫そうだ。

しかし正直残念だったのもまた事実。せっかく自分が考案した全く新しいタイプのメンタルケアセラピーの実験台にしてやろうと計画していたのがこれでパーになったのだから・・・。まあ次の機会を狙うとしよう・・・キシシシ。

「ジェットには私から伝えておくネ。お先にごちそうさまヨー」

朝っぱらから元気な猫眼が食器を片づけ、ジェットの部屋に走って行くのを見届けて、ジンは残りの食事を続けた。

もうこの村にいるのがウザったいからさっさと出て行く・・・それが今ジンが行った理由だったのだが真意はそうではない。もう思い出したくないから、この村を出て行きたいんだ。

ジンは皿に残った野菜くずをつまみながら窓の外の景色を眺めた。外ではもう働き者の人間が動き出し、村全体が活発になり始めている。この村人達を見てふと思う。

この村の人間達は、なにを記憶して何を忘れて、どうやって生きているんだろう？

覚えていたいこともあるだろう、もちろん忘れたいことだってたくさんあるだろう。じゃあ逆に忘れてしまった時の感覚とは、一体どんな風なんだろう？

苦しいのか？嬉しいのか？悲しいのか？激怒するのか？

きっとすべて違う。人が思い出を忘れる瞬間の気持ちは皆一様に同じ・・・何も感じる事など無い。

いつまでも覚えていたい事さえもいつの間にか忘れ、財布のコインの様に落としてそのまま気付くこと無く歩き去ってしまうのだろう。落としたコインは、誰が拾ってくれるのだろう？どうやって落としたコインを見つけることができるだろう？

もし財布に入れたコインの絶対に落とすことの出来ない方法があったとしたら、是非教えてほしい。

「メガネ君、さっきからボーっとして大丈夫かい？」

「なんか上の空っぽいけど、休まなくて大丈夫さ？」

「・・・余裕だ」

オレはできるだけ忘れたくない。

あの時の出会いも、あの時感じた気持ちも、耳に残っているハーブの音も、あの時の別れも、あいつの笑顔も、そして名前も・・・。

思い出したくもないが、覚えていたい。矛盾する二つの気持ちを誰にも見えない所に仕舞いこみ、今日もオレは剣をブラ下げて歩くことを誓った。

また会える日が来たら・・・一緒にハーブを聴きたい。

あの時と同じように・・・。

おまけ

名前 ジェット・アメジスト

年齢／性別 20／♀

誕生日 7月7日（蟹座）

誕生石 ルビー（情熱、滋しみ、威厳）

レベル 44

性格 男勝り がさつ 非常に短気

職業 魔術師

装備品 魔導師の杖 黒いローブ

好物 コーンポタージュ 犬

嫌物 虫類 蛇

眼／髪 深緑、ツリ眼／緑、ショート

身体的特徴 まな板寸胴

イメージカラー 紫

楽器 シンセサイザー

備考 「火」の属性を操る一流の魔術師

非常に短気キレやすい

希望CV 高山みなみ 朴璐美 豊口めぐみ